

白鳥の旅の雑感

阿部敏雄

白鳥の旅、スリムブリッジからアーテンメア、それにカールレイブロック各研究所と回り楽しさ一杯。頭の中は走馬燈の様。……私は職業柄、列車内の模様などを走り書きをさせてもらう。

カールレイブロック研究所見学を終え、昨夜一泊したホテルに到着。ホテルで夕食の準備を調べてもらい、夜影を見ながら駅に向う。2・3枚附近の写真を撮りながら駅に着いた。待合室には人影はまばら。改札口は事前に打合せてあるのでオープンに通る事が出来た。改札掛も笑顔で「白鳥グループOK」と言ってなごやかな雰囲気であった。

ホーム待合室には一杯の人影、例によって私達一行は飲物を……コーヒーを飲む。暫くすると私達の乗り込む列車が到着、客車は7両編成で1972年に開発された最近のMARK-Ⅱ客車と同一である。1等車は橙系統、2等車は紺系統の腰掛となっている。窓のピッチは同じで3列か4列の違いであった。車両と車両の渡り部は自動ドアであり、荷物を持って通るのには楽であった。車両内では半分程は禁煙場所になっていて、うっかり煙草を口には出来ない。かならず窓を見てからでないと煙草を飲むことが出来ない。エアーカーテンで仕切りになっている様子である。

1等車内のテーブルが固定されている腰掛と腰掛の間にはテーブルが固定されており、窓はハメ殺し、天井は小さな蛍光灯が通路に直角に数多く並べられた感じである。椅子はリクライニングでなくボタンを押すと尻の部分が約7~8cmほど前に出て少し傾斜する。空調車内放送設備があり、又デッキ部には片側にトイレ、片側にはトランク置場(3段)となっている。トイレは例によってたれ流しであったが、駅(停車中)は使用停止であった。

列車の遅れは10分まあまあのおくれ。横田先輩、吉川さん、玉田氏と私とで一つの場所に腰を卸し、地図をたよりに次の駅は、次のは何処と話題を出しながら……車内清掃の人、車掌と入れ替わり車内販売にコーヒーを注文、テーブルの上に置いてくれたが、例によって味の薄い感じのコーヒーであった。乗心地は極めて良く、車内を見渡すと楽しかった今日までの見学、鳥の夢でも見ている人もちらほら。

ロンドンに約20分ぐらいの遅れで到着、翌日ロンドン市内観光……観光部門は誰れかにおまかせしましょう。

おみやげの購入も全員一諸になどとパンフレットに記入されておったのだが、小生と玉田氏と観光の時に写真を撮り出来なかった処を、二人づれでと思い一諸にホテルを出る。みやげ物も買いたい。でも再度ロンドンに来る事が出来ないのではと思いながらカメラを肩に……目的地までタクシーで乗り込む。あとは足でやはりぶらぶらの方が撮るのに都合が良い。

テームス川辺の風影、バッキンガム宮殿、あまりゆっくりとしたせい、か、宮殿前での写真はおそすぎってしまった。宮殿をあとにロンドン空港へ……地下鉄の標識をさがし求める。初めての地下鉄利用だ。小生は英語がだめ、只玉田氏をたよるだけである。

地下が深く、下を見ると目がまわる様な深さ約60m程あるとの事だ。登り降りのエスカレータがある。切符は行先によって10、20、30ペンス(1P≒5円)で改札自動販売。自動通路。列車が来

る、乗り込む。これまで何事もなくまづまづ煙草を一ぷく。口に煙草を持っていけば、その車両は張り紙、禁煙車両。次の停車場まで煙草はだめ。停車と同時に次の車両へと移動、先づ一ぷく。

空港までは何程の駅があるだろうなどと玉田氏と話し込んで外は外の風影を眺めたり、駅名札を読んだりしているとなんとなく別の線路に入って来ているのに気付いた。さァ大変、3つも乗り越してしまった。ままよ、降りなければならぬ。切符を買い替えてと思いながら二人しおしお改札口へ。そこには黒人の女の改札掛がいる。玉田氏はペラペラとまではいかぬが一言二言いいながら「私達はロンドン空港に行くのだが」と言えば、その黒人の女改札掛は「何処のホームを通り3駅バックして、降りて2番ホームにて待つ様に、又空港行の列車が来るからそれに乗る様に。」と親切に知らせてくれた。何んだかんだと言われるのでは、何も訳のわからぬ2人。親切には頭の下る思い。やっどの思いで空港に。

ロンドン空港の大きさ、広さに驚くばかり。夜影も美しい。帰路地図をたよりにホテル到着、夕食後、又も玉田氏とつれだつて夜のロンドン夜影撮りとしゃれこんだ。屋の事もあるので注意に注意しながら目的地に議事堂前までに行く。自動車のいきかう様子。大晦日の夜だ。生れた日本ではいまごろ年越そば……などと思いながら議事堂前に来たところ人人、一ぱいの人。自動車という自動車は全部停車しているではないか。何事かわからぬ、なにか事故でもと思っていると時計の時報が0時……何んとも言うに云われぬおごそかな感じ、感無量。玉田氏と手を取り合つて、肩と肩をだき合つた。あァ、来て良かった。これも白鳥のおかげ。やはり感謝しなければ。年が明けて新らしい年へとうつり変るのだ。時報をききながら……突然、人々からはニューハッピーニューエアーの声。自動車という自動車からはホーンのひびき、蜂の巣をつついた様に一ッ気にぼく発。話をきけばクリスマスは静かなのだが、この時ばかりは地球がわれんばかりにさわぐのだそうです。よかった、よかった、誰れもが味わえぬこの時、誰れかれとなく、皆んなが皆んな新年おめでとうを言い合つて、たがいにはげまし合う。帰路電車は無し、タクシーすら無し。玉田氏と2人、夜の市内をホテルに向う。

わずか短日間の旅ではあったが、私にとって貴重な体験であった。旅を通じ感じた事は、人間たとえ国や人種が違つても考えること、行動することにあまり差はないなァということであった。何処へ行つても日本人がいたし、日本の製品もあふれていたが、その土地の人から受けた親切はとてうれしいものであった。こうした気持ちのふれあいがとてうれしく感じた旅であった。



(スリムブリッジのコハクチョウ夜間撮影 1971.12 本田)